

細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察

—— 相模野台地の層位的出土例と中部高地との対比から ——

諫訪間 順

1 はじめに

中ッ原第5遺跡B地点の細石刃石器群の調査は表面採集が契機となったが、その資料は表面採集品も含めて、細石刃石器群の単一文化層としての一括性を持っているものと評価できる（由井・吉沢・堤1990）。野辺山原では日本で最初に細石刃石器群の存在が明らかになった、矢出川遺跡（芹沢1954）をはじめとして多くの細石刃石器群が知られているが、中ッ原第5遺跡B地点の細石刃石器群はこれまでに知られていない特徴的な石器群であるがゆえその位置付けは難しい。まして、層位的な出土例に恵まれてない野辺山原では他の石器群との簡単な対比は困難であり、より広い地域を視座に置いた検討が必要とされる。

こうしたことから、ここでは層位的な出土例に恵まれた相模野台地の細石刃石器群及びその前後の石器群の変遷観を提示し、中部高地の石器群との対比を試みてみよう。

2 相模野台地における細石刃石器群とその前後の石器群の変遷

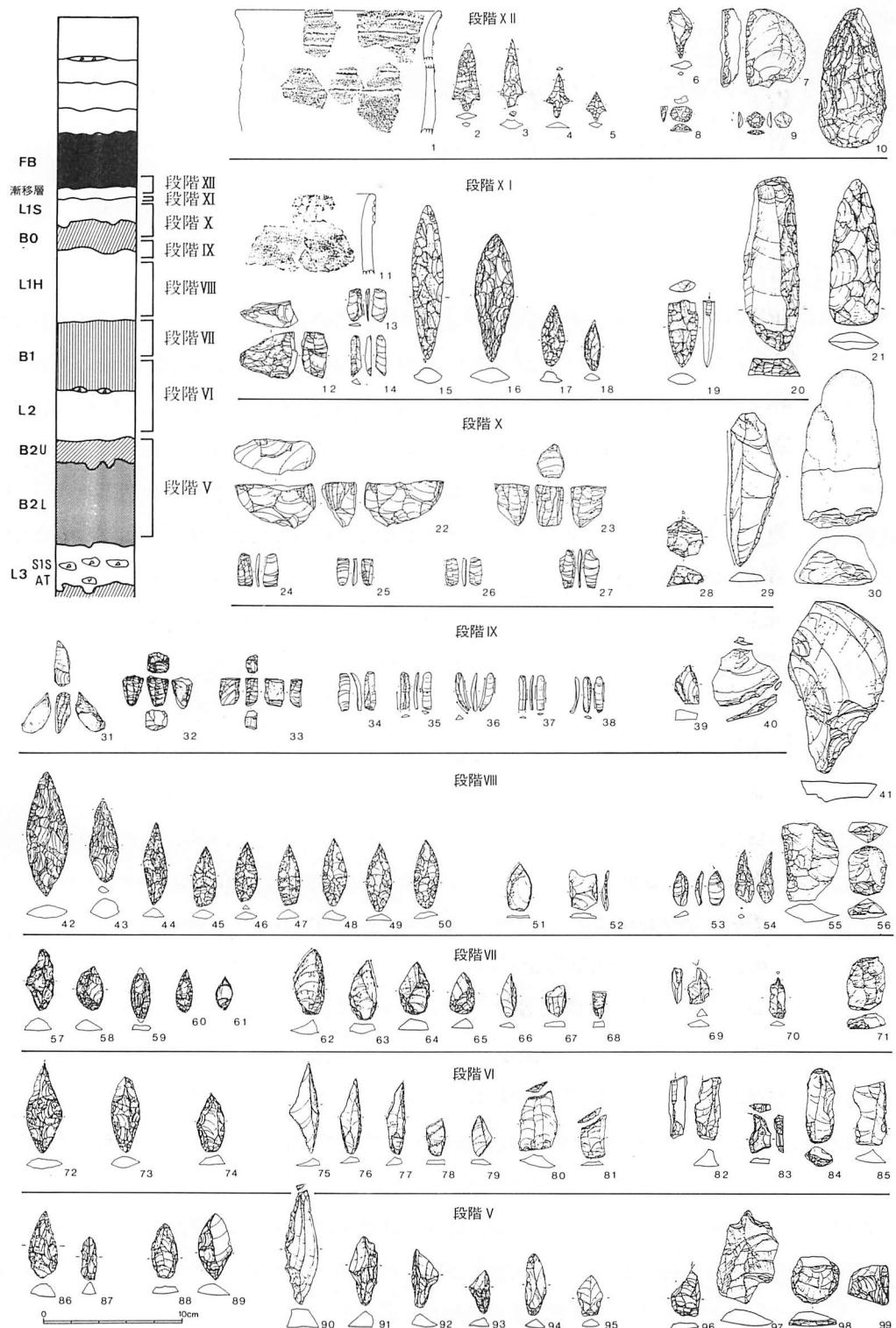
相模野台地の細石刃石器群の変遷はこれまでにも鈴木次郎氏（鈴木1983）、堤隆氏（堤1987）、砂田佳弘氏（砂田1988）などによって検討が加えられており、今日では3段階の変遷過程が示されている（諫訪間1988、堤1991）。ここでは、この細石刃石器群3段階（段階IX～XI）を中心として先土器時代終末から縄文時代初頭の石器群（段階VIII～段階XII）について概観してみよう（第1図）。

(I) 段階VIII

L1H層中部から上部に出土層位を持つ石器群である。

主な石器群としては中村遺跡第III文化層（伊藤1987）、月見野遺跡群上野遺跡第1地点第IV文化層（相田1986）、寺尾遺跡第II文化層（白石1980）等が挙げられる。

石器組成は尖頭器を主体とし、削器、搔器、彫器、錐器等によって構成される。尖頭器は両面加工、半両面加工、片面加工とあるが、両面加工のものが多く、大きさはバラエティーに富むが5cm～7cmの中形品が最も多い。削器は大半の剥片を素材としたもので、比較的多く検出されている。その他の加工具である搔器、彫器、錐器は少ない。ナイフ形石器は各石器群に数点認めら



第1図 段階V～段階XIIの石器群

れることもあるが定形的なものは極めて少なく、出土状況は共伴として積極的な根拠に欠けるものも多い。

石材はチャートや安山岩、細粒凝灰岩を多用し、黒曜石は少ない。

剥片剥離技術は尖頭器製作の技術基盤として、大形の剥片を目的とするものである。遺跡内で剥片剥離を行った形跡が認められない石器群もままあることは、石器の製作とその搬入のあり方のちがいを暗示する。

(2) 段階IX

L 1 H上部からB 0 中部までに出土層位を持つ石器群がある。

主な石器群としては代官山遺跡第III文化層（砂田1986）、柏ヶ谷長ヲサ第IV文化層（堤1983）、月見野遺跡群上野遺跡第1地点第III文化層（堤1986）、上和田城山遺跡第II文化層（中村他1979）等が挙げられる。

石器組成としては細石刃、細石刃核、彫器、削器、搔器、錐器、礫器等によって構成される。

石材は細石刃関係はほとんど黒曜石で、中～大形の削器は安山岩や凝灰岩を用いている。

本段階の細石刃核が野岳・休場型細石刃核（鈴木1973）で占められ、細石刃は両側縁が平行し、幅が狭いという特徴を持っている。

石材はほとんどが黒曜石を用いている。

(3) 段階X

B 0 中部からL 1 S上部までに出土層位を持つ石器群である。

主な石器群としては、上草柳遺跡第I地点第I文化層（堤1984a）、報恩寺遺跡（鈴木・矢島1979）、相模野No.149遺跡L 1 S下部文化層（鈴木1989）、下鶴間長堀遺跡第I文化層（堤1984b）等が存在する。

石器組成は段階IXとは基本的に変わらないが、細石刃核が野岳・休場型細石刃核のみで構成されるわけではなく、船野型細石刃核も新たに出現する。また、細石刃の形状が全体的な傾向として幅広であることが特徴として挙げられる。

石材は黒曜石は少なくなり、在地系石材といわれる細粒凝灰岩やチャートが多く用いられるようになる。

(4) 段階XI

L 1 S上部から上面に出土層位を持つ石器群である。

主な石器群としては、月見野遺跡群上野遺跡第1地点第II文化層（相田・小池1986）、寺尾遺跡

第I文化層（白石1980）、栗原中丸遺跡第I文化層（鈴木1984）、相模野No.149遺跡L1S上部文化層（鈴木1989）、長堀北遺跡第II文化層（小池1991）、勝坂遺跡（青木・内川1990）等がある。

石器組成は尖頭器、削器、搔器、石斧、礫器などで構成され、これに削片系の細石刃核が共伴する石器群もある。また、本段階に有舌尖頭器が共伴するかどうかは微妙である。¹⁾なお、寺尾I、相模野No.149、月見野遺跡上野第I～II、勝坂遺跡では土器の共伴が認められる。

石材は安山岩、細粒凝灰岩を多用するという特徴を指摘することができる。

(5) 段階 XII

漸移層から富士黒土層（FB）下部に出土層位を持つ石器群である。

主な石器群としては月見野遺跡群上野遺跡第1地点第I文化層（小池1986）、月見野遺跡群上野遺跡第2地点FB下部（戸田他1984）、柏ヶ谷長ヲサ遺跡FB下部文化層（中村1983）、代官山遺跡第I文化層（砂田1987）、長堀北遺跡第I文化層（小池1991）等がある。

石器組成は有舌尖頭器、尖頭器、削器、搔器、錐器、石斧等によって構成される。有舌尖頭器が主体となり尖頭器は少なくなる。まだ、石鏃は出現していない。土器は隆起線文系土器である。石材はチャート、安山岩、黒曜石などが用いられている。

3 中部高地との対比

中部高地での先土器時代終末から縄文時代初頭の石器群の変遷については、柳澤和明氏（1985）や堤隆氏（堤1987）、森嶋稔氏（1988）などによって多くの編年案が提示されている。ただこれらの編年案は層位的な裏付けに欠けることもあって「中部高地編年」ともいえるような共通の編年観の構築にまでは至っていないようである。

しかしながら、細石刃石器群の変遷については、関東地方も含めて中部日本では野岳・休場型細石刃核が最古期に展開し、船野型細石刃核そして、削片系の細石刃核の3段階の変遷は共通の認識としてもたれつつある（堤1987、堤1991など）。また、近年では柳又遺跡の層位的な出土例を基にして、野岳・休場型細石刃核から削片系の細石刃核への変遷が提示されるなど（谷口1991）、新資料の蓄積によるその裏付けもなされつつある。

ここでは、前述した相模野台地の各段階の石器群との内容の共通性を検討しながら、中部高地の先土器時代の終末期から縄文時代初頭までの石器群の編年的な対比を行ってみよう。

(I) 段階VIIIに対比できる石器群

相模野台地では段階VIIIとして区分された尖頭器を中心とした石器文化はナイフ形石器以後細石刃以前として位置付けられるものであるが、中部高地では明確にこの段階として位置付けられる

石器群は少ない。すなわち、細石刃文化直後の縄文時代初頭の石器群との判別がつきにくいといいう理由もあってのことである。²⁾ あえて、この段階の石器群を抽出すると、層位的に明らかなものは柳又遺跡C地点に細石刃文化に先行し、ナイフ形石器文化に後続すると考えられる石器群が挙げられるくらいであろう。また、層位的に前後の石器群との関係が明らかになっておらず、ナイフ形石器などと混在している観はあるが、柏垂遺跡の尖頭器石器群がこれに対比される可能性があろう。また、中ッ原遺跡（麻生1955）や矢出川第VIII遺跡（明治大学考古学研究室編1982）の尖頭器石器群にもその可能性が残ろう。

（2）段階IX・Xに対比される石器群

段階IX及びXは野岳・休場型細石刃核を共にもつ細石刃石器群であり、石器組成など基本的な部分の変化はほとんどない。相模野台地では段階IXが野岳・休場型細石刃核のみで構成され、細石刃自体も細く長い形状が指向され、また、石材もほとんどが黒曜石であるという点によって段階Xと区分がされている。さらに、段階Xは船野型細石刃核の出現とその影響のための細石刃の幅広化の段階としても捉えられるものである。しかし、中部高地ではこの2段階の区分は現在のところ微妙であるのであえて分離しないでおくことにする。こうした細石刃文化は矢出川第I遺跡をはじめ同III・IV・VII遺跡など矢出川遺跡群には多く（戸沢1964）、野辺山原はもとより中部高地の細石刃石器群の大半を占めるものと考えられる。

矢出川第I遺跡や同IV遺跡などでは、多量の野岳・休場型細石刃核と一緒に船野型細石刃核が出土している。このことをもって、確実な両者の共伴例といえるかは疑問であるが、相模野台地では野岳・休場型細石刃核を主体とした細石刃文化の後半に船野型細石刃核が共伴する事例もあることから、矢出川第I遺跡、同第IV遺跡では段階Xに対比される石器群が存在していたと考えることも可能である。⁴⁾

（3）段階XIに対比される石器群

段階XIは尖頭器を主体とした石器群である。相模野台地の当該期の石器群は尖頭器を中心に削片系細石刃核が伴うものも多い段階である。そして、隆起線文系土器以前の土器群を持つものである。相模野台地では現在までのところ、神子柴系石器群とされるものでも、石刃が欠落するものや、土器や細石刃が伴うものが多く、中部高地との単純な比較は困難である。敢えて対比を試みると、神子柴遺跡（林・藤沢1961）や唐沢B遺跡（森嶋1970）、横倉遺跡（神田・永峯1958）などの神子柴系の石器群が対比される。さらに、下茂内遺跡（近藤1990）、馬場平遺跡（芹沢1955）や上ノ平遺跡（杉原1973）などの尖頭器石器群も対比できよう。

(4) 段階XIIに対比される石器群

段階XIIIは相模野台地では有舌尖頭器を主体とし、隆起線文系土器群が共伴する段階の石器群で、中部高地では柳又遺跡B地点BII群（小林1967）や立石遺跡の隆起線文系土器と有舌尖頭器・尖頭器の一群（宮下・吉沢1982）、さらに、小馬背遺跡（国学院大学考古学研究室1989）、西又II遺跡（国学院大学考古学研究室1989）などが対比される。

4 中ッ原第5遺跡B地点の位置付け

以上、中部高地の細石刃石器群及びその前後の石器群と相模野台地における変遷観との大まかでやや乱暴ともいえる対比を行ってみたが、肝心な中ッ原第5遺跡B地点の石器群は相模野台地の段階区分のどこに対比できるのであろうか。

中部高地において中ッ原第5遺跡B地点の細石刃石器群は、石器組成や細石刃の製作技術の特徴から柳又遺跡C地点や池の原遺跡などとほぼ同じ段階の石器群であると評価できよう。しかし、相模野台地には同様の内容を持ち直接対比できる石器群が存在していない。ただ、それが削片系細石刃核のみで構成され、尖頭器を含まないということは、神子柴系文化の波及以前と考えることができ、相模野台地の削片系の細石刃核を出土した月見野遺跡群上野遺跡第1地点第II文化層や長堀北遺跡第II文化層などの尖頭器や土器を共伴する石器群に先行する段階の石器群であることが少なくともいえよう。

ここで、中ッ原第5遺跡B地点を含めた中部日本での細石刃文化の変遷観を整理すると、次の4段階区分が提示できる。

細石刃文化第1段階 野岳・休場型細石刃核のみ（段階IX）

細石刃文化第2段階 野岳・休場型細石刃核+船野型細石刃核（段階X前半）

細石刃文化第3段階 削片系細石刃核のみ（段階X後半）

細石刃文化第4段階 神子柴系尖頭器+削片系細石刃核（段階XII）

上記の4つの段階区分はいくつかの問題を含んでおり、第3段階と第4段階の差は時間的な差を表す一方、中部高地と相模野台地との地理的な隔離による削片系細石刃文化や神子柴系文化の波及の仕方の違いとして捉えられる可能性もあり、地域相の違いを反映しているのかもしれない。今後更に検討を加えなければならない問題である。

こうした問題もあるにせよ、この段階区分において中ッ原第5遺跡B地点は、神子柴系石器群を含む直前の段階である細石刃文化第3段階、すなわち、先土器時代の最終末期の細石刃文化であると評価できる。そして、その内容からは北方系の細石刃文化の直接的波及した段階よりはやや後出し、在地化し変容した段階を示しているものと捉えたい。

いずれにしても、中ッ原第5遺跡B地点の細石刃文化の存在はその直後に到来する北方系の文

段階	相 模 野	中 部・関 東	野 辺 山
4		○	○
3	○		
2			
1			

第2図 中部日本における細石刃石器群の段階変遷についての試案

化である神子柴文化の波及・定着の過程と合わせて、縄文文化の起源を探る上でも重要な位置を占める石器群であるといえよう。

5 おわりに

相模野台地の細石刃文化及びその前後の石器群の層位的な出土例を紹介し、中部高地の石器群との対比を行ってみた。黒曜石原産地とその消費地ともいえる両地域の関係は大枠では合致することが示せたものと考える。しかしながら、中部高地の諸石器群はその一括性に不安があり、柳又遺跡等の一部を除いては相模野台地の段階区分によれば複数の段階の内容が混在しているようにも見受けられた。特に尖頭器を含む石器群の位置付けは非常に困難なものであった。

いずれにせよ今回は予察ということで、より詳細な検討は別の機会に行いたいと考えている。

1990年4月に行われた野辺山原中ッ原第5遺跡B地点の調査にはまだ3ヶ月という長女を連れて家族3人で参加させてもらった。堤隆氏をはじめ調査参加者の皆さん、宿泊先の「森のふあみりい」のオーナー夫妻には大変お世話になりました。感謝申し上げます。

註

- 1) 勝坂遺跡、上野遺跡では基部が意識的に作り出された尖頭器が存在しており、これを初源的な有舌尖頭器と評価するかは議論の別れるところである。また、相模野No.149遺跡と長堀北遺跡では明確な有舌尖頭器が存在しているが、いずれも、排土中から検出されたものでその共伴についての根拠は弱い。
筆者はこれまで本段階には有舌尖頭器は伴わないと評価していたが、勝坂遺跡の例などを考慮し、初源的な有舌尖頭器が共伴する段階として再評価をする方向で検討しているが結論は未だ着いていない。
- 2) 例えば、馬場平遺跡や上の平遺跡の尖頭器文化の位置付けについて、矢出川遺跡の細石刃文化の以前にするか以後にするかは、研究者でまちまちである。細石刃以前に位置付けている研究者は大竹憲昭氏（大竹1988）、森嶋稔氏（森嶋1988）、白石浩之氏（白石1989）らがおり、細石刃以後に位置付けている研究者は柳沢和明氏（柳沢1985）、栗島義明氏（栗島1986）、堤隆氏（堤1987）らがいる。この例は極端な例であるが尖頭器をめぐる評価の難しさを表しているといえよう。
- 3) 国学院大学考古学研究室谷口康浩氏には柳又遺跡の各地点の石器群についての御教授いただいた。柳又遺跡からは相模野台地の段階Vから段階IVまでのほぼすべての段階に対比できる石器群が層位的に出土している。中部高地において良好な基準となる石器群である。
- 4) 安蒜政雄氏は矢出川遺跡群の性格を検討するなかで、矢出川第I遺跡の船底形細石刃核の存在から「細石器文化の新旧二つの段階にまたがって残された、時間的な差を持つ複数の石器群のかさなりがあった」（安蒜1982）ことを指摘しているが「船底形細石刃核」は「棱柱形細石刃核」に比べ古期に位置付けられており、筆者とは逆転した位置付けとなっている。

5) この第3段階には群馬県頭無遺跡(前原1988)、や埼玉県白草遺跡(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1990)などのような、荒屋遺跡などに等質な頁岩製の石器群が認められているが、こうした、東北日本の細石刃文化そのものの波及により残されたと推定できる石器群と、中ッ原第5遺跡B地点や柳又遺跡A地点等の在地の石材によって細石刃が製作された石器群とを、時間的な差を表すものとして区分するのか、湧別技法の分布範囲による地域相の違いによるものとして評価するかは今後の課題である。

引用・参考文献

- 相田薰編 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』 大和市教育委員会
- 青木豊・内川隆志 1980 「神奈川県勝坂遺跡第45次調査—相模野台地における草創期の一様相—」『考古学ジャーナル』324
- 麻生順司 1987 「長堀南遺跡」 大和市北部処理場建設予定地内遺跡調査団
- 麻生優 1955 「信濃・中ッ原の無土器文化」『石器時代』2
- 麻生優・岡本東三 1990 「岐阜県池の原遺跡発掘調査概要」『第3回 長野県旧石器文化研究交流会発表要旨』
- 安蒜政雄 1982 「細石器文化における矢出川遺跡群の性格」『報告・野辺山シンポジウム1981』
- 安蒜政雄 1984 「日本の細石器文化」『駿台史学』60
- 伊藤恒彦他 1987 『中村遺跡』 中村遺跡調査団
- 伊藤恒彦 1988 「相模野台地の2種類の尖頭器石器群」『大和のあけぼのII』 大和市教育委員会
- 大竹憲昭 1988 「長野県先土器時代文化の編年」『第1回長野県旧石器文化研究交流会』資料
- 織笠昭 1984 「細石器文化組成論」『駿台史学』60
- 織笠昭 1987 「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』13
- 櫻田誠 1987 「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第III文化層のナイフ形石器と槍先形尖頭器」『大和市史研究』13
- 金山喜昭・土井永好・武藤康弘 1984 『橋本遺跡先土器時代編』 相模原市橋本遺跡調査会
- 神田五六・永峯光一 1958 「奥信濃横倉遺跡」『石器時代』5
- 栗島義明 1986 「槍先形尖頭器石器群の研究序説」『考古学研究』32-4
- 栗島嘉明 1988 「神子柴文化をめぐる諸問題—先土器・縄文の画期をめぐる問題(一)一」『研究紀要』4
- 小池聰 1991 『長堀北遺跡—本文編』 大和市教育委員会
- 国学院大学考古学研究室 1989 「小馬背遺跡1989」
- 国学院大学考古学研究室 1990 「柳又遺跡A地点第一次発掘調査報告書」
- 小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」『信濃』19-4
- 近藤尚義 1990 「大形両面加工尖頭器の典型的な製作跡」『考古学ジャーナル』324
- 埼玉県埋蔵文化財調査団 1990 「埼玉県白草遺跡の細石刃文化」『考古学ジャーナル』324
- 白石浩之 1980 「第II文化層」「第III文化層」「寺尾遺跡」 神奈川県教育委員会
- 白石浩之 1986 「ナイフ形石器文化終末期の様相—相模野台地の茂呂型ナイフ形石器群について」『神奈川考古』22
- 白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍』 東大出版会

- 杉原莊介 1973 「長野県上ノ平尖頭器文化」『明治大学文学部研究報告考古学第3冊』
- 鈴木次郎 1983 「細石器—関東・中部地方を中心に—」『季刊考古学』4
- 鈴木次郎 1984 「栗原中丸遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3
- 鈴木次郎 1896 「ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現」『神奈川考古』22
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』3
- 鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8
- 砂田佳弘 1986 「代官山遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書11
- 砂田佳弘 1988 「相模野の細石器—その発生と展開に向けて—」『神奈川考古』24
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握」『神奈川考古』24
- 諏訪間順 1989 a 「ナイフ形石器文化の終焉と尖頭器文化の成立—相模野台地を中心に—」『旧石器考古』38
- 諏訪間順 1989 b 「相模野台地における尖頭器の様相」『長野県考古学会誌』59・60
- 芹沢長介 1955 「長野県馬場平遺跡略報」『石器時代』1
- 中村喜代重他 1979 『上和田城山』 大和市教育委員会
- 長野県考古学会旧石器部会編 1989 「シンポジウム特集号 中部高地の尖頭器文化」『長野県考古学会誌』59・60
- 月見野遺跡群調査団 1969 『概報 月見野遺跡群』
- 堤 隆 1987 「矢出川遺跡における船野系の細石刃文化資料について」『旧石器考古』32
- 堤 隆 1987 「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』13
- 堤 隆 1991 「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』17
- 戸沢充則 1964 「矢出川遺跡」『考古学集刊』2-3
- 林茂樹・藤沢宗平 1961 「神子紫遺跡第1次発掘調査概報」『考古学』9-3
- 前原豊 1988 「群馬県柳久保遺跡群頭無遺跡」『第2回東北日本の旧石器文化を語る会』
- 宮下健司・吉沢靖 1982 「野辺山原における「土器出現期」遺跡の発見」『報告・野辺山シンポジウム 1981』
- 明治大学考古学研究室 1982 『報告・野辺山シンポジウム 1981』
- 森嶋稔 1970 「小県郡唐沢B遺跡」『信濃考古』28
- 森嶋稔 1988 「先土器時代の石器」『長野県史考古資料編』1-4
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1
- 由井茂也・吉沢靖・堤 隆 1990 「信濃野辺山原の細石刃文化—中ッ原5B地点の細石刃文化資料から—」『古代文化』42-11